色が黒くて　味噌をつけたり

2021/09/10

　９月になりました。お元気のことと存じます。実りの秋です。私の友人で、緑区で、趣味で有機・無農薬栽培の家庭農園を楽しんでおられる方がおいでです。ときどき、採れたての新鮮なお野菜を玄関まで届けて下さいます。いつも、旬のいろいろな野菜が、彩り美しく、紙のお皿に盛ってあります。まさに、セザンヌの静物画です。

　先日、いただいたナス・トマト・オクラ・ピーマンと、どれも素晴らしい出来でした。でも、送られてきたメールには悔恨の言葉がありました。

「今朝、この夏最後の夏野菜を細やかに収穫致しました。夏中盤までは順調に推移していましたが、長雨になってからは散々です。まずとうもろこしが虫に可愛がられて全滅。大根・小蕪・人参が畝の中で腐ってしまい全く収穫できないままオワリ。極めつけはトマト。１０日程前の台風の強風で屋根がボロボロに。トマトの故郷はアンデスの中腹の乾燥地帯で雨に大変弱い野菜です。屋根が無くなって雨ざらしのトマトは根腐れ病で、以降、出来ても根が腐り落下の繰り返しで昨日撤去しました。天白区に有る農業センターの指導員のアドバイスを活かせずバットを一度も振らず見逃し三振、状態です。クサラズ、アセラズ冬野菜の作付けに頑張ります」。

　トマトは、まさに、パンデミックの苦難ですね。農園主のご苦労が忍ばれます。いえいえ、どれも、大きくて、新鮮で、美味しかったです。お茄子は、直ぐに、串に刺して、油をつけて焼いて、味噌をぬって「しぎ焼き」にしていただきました。美味しかったです。

狂歌師　蜀山人

江戸の戯作者蜀山人が、田舎出の若いおさんどんを「ナスのしぎ焼き」になぞらえて、

小娘も　はやこの頃は　色気付き　油つけたり　櫛（串）をさしたり

— と詠みました。

それを受けて、友人の山東京伝が、

油つけ　櫛（串）をさしたは　よけれども　色が黒くて　味噌をつけたり

— と返しました。

いまの世では、パワハラやセクハラとして問題になるでしょう。河村市長も、罪な時代に生まれたものです。

足軽 怒る　お軽 恐がる

もう一つ、太田蜀山人の狂歌をご紹介します。これは私が小学校５年生の時に貸本屋さんで立ち読みして覚えたものです。足軽（あしがる）とお店の女中さんの「水かけ論」です。

足軽の　来かかる足に　水かかる
足軽　怒る
お軽　怖がる

近江八景の狂歌

狂歌師の蜀山人は、本名　大田南畝（おおた なんぽ　1749-1823）といって、江戸時代の御家人でした。勘定奉行配下のお役人のときに大坂に赴任しました。途中、琵琶湖を観て廻りました。有名な江戸の狂歌師がきたというので駕籠掻きが、「近江八景を読み込んだ歌を作ったら、ただで乗せてあげましょう」といいました。さっそく、蜀山人は狂歌を詠んでみせました。

乗せたから　先は　粟津か　ただの駕籠
比良　石山は　走らせて　三井

「じゃあ、五 七 五 の俳諧で作れますか」と籠屋がいいました。

七景は　霞の中や　三井の鐘

因みに、近江八景は、次のようです。

石山の秋月（いしやまのしゅうげつ）
勢多（瀬田）の夕照（せたのゆうしょう）
粟津の晴嵐（あわづのせいらん）
矢（八）橋の帰帆（やばせのきはん）

三井の晩鐘（みいのばんしょう）
唐崎の夜雨（からさきのやう）
堅田の落雁（かただのらくがん）
比良の暮雪（ひらのぼせつ）

紅梅ねえさんの恋文

落語には、お女郎さんからもらった「恋文」があります。これも、近江八景が読み込んであります。見事です。

恋しき君の面影を、しばしが程は三井もせで、
文の矢橋の通い路や、心堅田の雁ならで、
我れ唐崎に夜の雨、濡れて乾かぬ比良の雪、
瀬田の夕べと打ち解けて、堅き心は石山の、
月も隠るる恋の闇、粟津に暮らす我が思い、
不憫と察しあるならば、また来る春に近江路や、
八つの景色に戯れて、書き送りまいらせそろ、かしく

都築正道